

第1回検討会における意見の概要

【国際園芸博覧会の開催意義】

- 「2005 愛・地球博」では、国として開催する意義についての議論を重ね、誰もが環境問題のステークホルダーになるということを前提とした博覧会とすることとした。この国際園芸博覧会ではSDGs等の世界的な課題について、どのような立ち位置で世界に問うのかとの議論が必要。SDGsやSociety5.0などの新しいテーマの推進や、モノの生産よりコトの生産、イノベーションよりもクリエイション、誰もが快適に暮らせる人間中心のまちづくりへの移行など、社会は大きく変化している。こうした変化を背景に、国際園芸博覧会を横浜・上瀬谷で開催する意義を十分整理する必要がある。
- 横浜市のための横浜の園芸博覧会という域をまだ出していないので、A1クラスの国際園芸博覧会として、どのように開催するのか、よく検討してほしい。
- 地域経済への貢献と共に、国全体の経済の活性化、文化の発展につながるような国際園芸博覧会の開催をめざすべき。
- 横浜市として上瀬谷地域をどのようにモデル化できるか、日本のこれからの超高齢社会においてひとつの先端的な生き方につながるまちづくりを提案できるよう、議論を深めるべき。
- 超高齢社会にあって、「生きていてよかった」という場所を作ることが必要。人と人の出会いの創出、効率化や均質化とは異なる価値観を示せることが重要。
- 国際園芸博覧会を「花」という狭義にとらえるのではなく、中山間地域の耕作放棄地や担い手不足の問題、高齢化の問題等から多面的に捉え、関連させて検討することが開催意義にもつながっていくのではないかと。また、「グリーンインフラ」は、一般的な社会資本的な整備だけでなく、森林や農地、生物多様性や環境までをグリーンインフラとして広義にとらえ議論していきたい。
- 花や緑との関わりを考えることを通して、新しい技術革新が進む社会において人間の幸せの姿はどうあるべきかを考えていきたい。

【国際園芸博覧会のコンテンツ】

- 市民が参加しての将来の新しい園芸文化を発信する場となってほしい。
- 海外からの来場者や関係者が日本全国各地を回るように、全国自治体とのネットワークをこの国際園芸博覧会を通して築けるとよい。
- 生物多様性や地球規模の環境保全といったものがどういうものか、具体的に体感できるものを見せてほしい。
- 花や緑、農業や環境まで幅広くとらえ、人間の幸福度が高まるようなコンテンツを打ち出せるとよい。
- 日本の生け花は、日本特有の花文化であり、自然や植物に対する信仰心と結びついている。イングリッシュガーデンよりも、琳派絵画にあるような日本の花や、日本の里山や風景、蓮田というような日本の原風景を国内外へ発信してほしい。
- 農地を含めたまちづくりの提案を行える場所で、クールジャパン、日本の伝統や文化をどう組み合わせるかが求められている。
- 横浜での開催のため、都市型農業やスマート農業というものが材料となる一方で、農業全体や花き産業全体を視野に、地方の現状も踏まえた「農の発展」を視野に入れてほしい。
- 日本から発信するだけでなく海外からの出展者の園芸文化や技術を情報発信できるような仕組み、またはそのような魅力があることを海外へ向けて発信する取組みが必要。海外から出展したいと思ってもらえるようにする必要がある。
- 日本、横浜、上瀬谷ならではの時間、空間、価値を体験できるという部分をどう見せるのか、具体化することが必要。バーチャルをうまく使いつつ、やはりリアルな体験が強みになる。

【機運の醸成】

- 大阪花博は6年前からプレイベントを続けて行い国民への周知を徹底した。グリーンインフラに関しては、横浜市の市民力がその公共インフラにまで及び、社会資本は自分たちのものであるとの意識を高めることに意味がある。市民と国民がこの博覧会に何を期待するのか、期待できるのかをプレイベントの中に織り込んでいくことが必要。国際園芸博覧会での経験が、グリーンインフラの管理を担う市民意識を高揚させる機会となりうる。
- 開催までの間、様々なワークショップ等を通して人と人との関係性を築いていくべき。
- 2025年の大阪万博から2年後の横浜での国際園芸博覧会を、どのように相乗効果で盛り上げられるかを考えることが大事である。
- 国際園芸博覧会の開催意義をどのように伝えていくか、国内外に向けての事前のコミュニケーションの作り込みが極めて大切。観光プロモーションとも協力するべき。

【将来のまちづくり】

- 人口減少が進む中で新たな都市開発を行うことは疑問符が付く時代。世界へ発信できる新しい要素やメッセージ性の高いまちづくりを創出することが重要。
- ネットワーク社会を意識したまちづくりにつながるように、跡地利用について精緻に計画してほしい。
- 旧上瀬谷通信施設の現在の土地利用はほぼ農地である。跡地利用として農地を含めた提案が必要。

【輸送計画】

- 車の利便性は高いが、公共交通は脆弱である。将来の横浜市にとっても有効な輸送アクセスを検討するべき。
- 会場へのアクセスについては集客に大きく影響する。準備をしっかり進めてほしい。

【その他】

- 輸出の可否を含め、横浜の国際園芸博覧会で使用できる植物や花材等について、前広に出展国と連絡を取り、情報提供をするべき。
- 園芸農家の新規参入は少ない状況であり、生産農家が継続的に経営できるようになることが必要。国際園芸博覧会が単なる起爆剤で終わることがないよう、花きの需要が、地域や家庭レベル、個人まで拡大・浸透するような波及効果を期待。
- 博覧会はシンポジウムでないので、単に方向性だけを打ち出すのではなく、具体的な解決策を示すことが重要。
- テクノロジーの進展は著しい。運営や計画については柔軟性が必要である。